

「ゼッケル文庫」に見る 16 世紀の金属活字版印刷術の様相 3

ジャン&フランソワ・フレロン兄弟の『アーズ集成』

只野 俊裕

はじめに

東北大学附属図書館所蔵のゼッケル文庫には、1500 年代にリヨン (Lyon) で印刷された書籍が 23 タイトル 31 冊あります。これらはすべて貴重図書に指定されています。本稿では、それらの中から『アーズ集成』を紹介しします。

リヨンはルネサンス期にヨーロッパの交通の結節点であったといわれ、さまざまな文化が交錯する町でした。15 世紀から 16 世紀にかけて出版の中心地であったヴェネツィア、バーゼルと並んで印刷・出版の町でもあったのです。これらの諸都市において、メディアの誕生をもたらした新興産業を担う印刷人・出版人と人

文学者たちが交歓し様々な書籍を世に送り出したのでした。

ゼッケル文庫の調査では、書籍を形成するもの、特に書体、版面の構造、用紙、製本に留意しながら当時の印刷出版文化が形成される様子を考察してきました。本稿は『アーズ集成』を出版したフレロン兄弟印刷所の成り立ちと、そのプリンターズマーク「蟹と蛾」に注目し、「フェスティナ・レンテ」の図像のヴァリエーションとその起源を考察します。そして最後に本書の詳細な書誌調査報告を記載します。

1. 『アーズ集成』(ゼッケル文庫：排架記号 VI,D2-47)

本資料の『アーズ集成』についての簡略書誌は以下のようになります。

Summa Azonis : Summa perutilis excellentissimi iuris monarchae domini Azonis, nuperrime maxima diligentia castigata, additoq[ue] novo repertorio, quo facilius quae studiosissimus quisq[ue] requirit, occurrere possint.

Lugduni : Sub Scuto Coloniensi, Apud Ioannem & Franciscum Frellaeos, fratres, 1540.

資料について、2005 年 (平成 17 年) 東北大学附属図書館発行の『平成 17 年度常設展 (後期) 展覧目録』には次のように紹介されています。

「アーズは註釈学派の最高峰をなす法学者でありその著書『勅法彙纂・法学提要集成』(Summa Codicis et

Institutionum) は法学者必携の書とされ、「アーズを持たぬ者は法廷に入るべからず」と言われたほどであった。その学問は 13 世紀末から 14 世紀にかけてのキヌス、バルトルス、バルドゥスら註解学派に受け継がれた。」

つまり、内容的には、アーズ・ポルティウス (Azo Portius) あるいはボローニャのアーズと呼ばれる 13 世紀の法学者が、ユスティニアヌス法典を実務用に要約したものです。ですから、たんにアーズ『要約』と呼ばれることもあります。本資料は、ジャン&フランソワ・フレロン兄弟 (the Frellon brothers, Jehan (Jean II) and François) によりリヨンで 1540 年に刊行されました。1540 年以前には、1530 年に、同じくリヨンで別の出版者から刊行されており、その後も同様のタイトルで繰り返し出版されています。

2. フレロン兄弟

今回紹介する『アーズ集成』を印刷出版したジャン・フレロン (2 世) とフランソワ・フレロンは、1536 年

から1568年までフランスのリヨンにおいて活動しました。入念に編集をした美しい書物を製作したことで知られています。その書物の多くには、著名な画家・版画家ハンス・ホルバイン (Hans Holbein) の下絵から作られた木版画が挿画として使われています。

ジャン・フレロンは、神学者・医者であり指導的な宗教改革者でもあったミシェル・セルヴェ (Michel Servet) や、改革派の書籍商アントワーヌ・ヴァンサン (Antoine Vincent)、そして宗教改革の大指導者ジャン・カルヴァン (Jean Calvin) の友人として、また支持者として、かれらの往復書簡の便宜をはかったり出版物を流布しました。1553年にジャン・フレロンが編集した『新約聖書』(Le nouveau testament de Jesus Christ) の挿画には、イエス・キリストを誘惑する悪魔が描かれていま

すが、その悪魔は割れたひづめをもつ (カトリックの) 僧の姿でした。この新約聖書は、俗語であるフランス語で出版されています。

つまり、フレロン兄弟はリヨンを拠点としたユグノーであり、出版者・印刷業者として、他の同業者とともに、人文主義者・宗教改革者と強固に結びついた活動を展開し、最後はリヨンを追われることになったのです (1568年)。

ところで、フレロン兄弟は二種類のプリンターズ・マークを使用しました。初期には、「翼のある正義の女神の肖像」、1540年以降は、「蟹と蛾」です (「蟹と蝶」という表記もある)。これはいったい、何を意味していたのでしょうか。

3. Festina lente (フェスティナ・レンテ)

『アーツ集成』の表紙を開くと、大扉に「MATVRA」の文字を添えた「蟹と蛾」の図像を見ることができます (図1)。これはフェスティナ・レンテ (Festina lente) という格言を図像化したもののひとつです。その他にも、同意の図像として、蝸牛とウサギ、魚とカメレオン、草木模様と組み合わせたダイヤモンド指輪、錨にからみつくイルカなどがあります。

Festina lente は、一般的に「ゆっくり急げ」と訳されています。この格言は、エラスムス (Desiderius Erasmus Roterodamus, 1466 - 1536) の『格言選集』(Adagia) に取り上げられ、詳しく考察されています。その中で、ローマ帝国の二人の皇帝、オクタウィアヌス・アウグストゥスとティトス・ウェスパシアヌスがとても気に入って

いた言葉であることを述べた一節があります。

アウグストゥス金貨の裏に、「蟹と蛾」の図像を刻印したものがあります。Festina lente は、ユリウス・カエサルに見いだされ、彼の養子となり後継者となったアウグストゥス (オクタウィアヌス) が、確かに好んだ格言でした。

エラスムスの『格言選集』では次のように語られています。「彼 (アウグストゥス*) はこの二つの言葉 [からなる格言] でもって、物事を遂行するにあたって意図した迅速さと入念な緩慢さを同時に適用するように勧めた。ゲリウスはラテン語の *maturus* (熟した) という一言でもってこの点が確実に語られていると考える。*Maturari* (速やかに行われる) とは、適切な時よりも早過ぎも遅過ぎもしないで、まさにちょうど良いときにおこることを言うからである」(『格言選集』)。ちなみに、文中のゲリウス (Aulus Gellius) とは、2世紀のローマの文法学者であり、エラスムスはその分析を引用して、Festina lente は、*matura* によつて的確に言い換えられるというのです。(*は著者注)

アウグストゥス当時のローマは、領土拡張期から領土維持期への転換期を迎えていました。カエサルが、ルビコン川を渡るという国法を犯し、内乱に訴えて打倒した共和政体 (元老院を核とした) でしたが、後を継いだオクタウィアヌスはその共和政体への復帰を宣言します。その数日後、元老院はオクタウィアヌスに



図1 「蟹と蛾」の図像

アウグストゥスの称号を贈ります。これがアウグストゥスの改革の第一の布石でした。カリスマ性をそなえたカエサルは華々しく急激でしたが、道半ばにして暗殺されます。後を継いだオクタウィアヌスは、手段は違っても目的ではカエサルと考えを一にしています。彼は優秀な政治家でした。戦略を立て、丁寧に課題をあぶり出し、布石を打ち、波風をたてないようにしながら、時間をかけて着実に成果を積み上げ、いつのまにか共和政体を骨抜きにして、初代ローマ皇帝となりました。パクス・ローマナ（ローマの平和）の幕開けです。そのような彼の座右の銘が *Festina lente* であつたのです。

一方の皇帝ティトス・ウェスパシアヌス銀貨の裏側には、「錨にからみつくイルカ」の図像が刻印されています。この「錨にからみつくイルカ」は、イタリア・ルネサンス期の印刷界・出版界の巨人アルド・マヌーツィオのプリンターズ・マーク（図2）としてよく知られています。アルドの本名はテオバルド・マヌッチ（Theobaldo Manucci）、略してアルド・マヌーツィオ（Aldo Manuzio）、ラテン名をアルドゥス・マヌティウス（Aldus Manutius）としました。

エラスムスの『格言選集』はこれについても次のように述べています。

「また、ティトス・ウェスパシアヌスにこの格言が気に入ったことがとても古いあの貨幣から容易に推測される。その貨幣の一つをアルドゥス・マヌティウスが私に見せてくれた。（中略）ヴェネツィアの貴族ピエトロ・ベンボから彼に贈られたものであつた」（『格言選集』）。

エラスムスは「錨にからみつくイルカ」の図像の意

味を考察し、これをプリンターズ・マークとして印刷・出版活動を行ったアルドゥス・マヌティウスの事績を称賛しています。ピエトロ・ベンボ（Pietro Bembo）はイタリア・ルネサンス期の代表的な人文学者としてイタリア語の革新に貢献した人物であり、アルドは彼から贈られた古代ローマの銀貨を、さらにエラスムスに見せたことがあつたというのです。*Festina lente* は、直訳すれば「ゆっくり急げ」であることは間違いありませんが、エラスムスはこれを、*matura* とあわせて、適切な時に速やかに行われる、という解釈を示しています。ローマ帝国の皇帝アウグストゥスとウェスパシアヌスの座右の銘であり、かれらの偉業を照らすものでした。つまり、アルド・マヌーツィオの出版はこれに比肩するものだということです。リヨンのフレロン兄弟も、同意の図像をプリンターズ・マークに採用することで、自分たちの手になる出版はすべて「時宜に適った行い」であると主張したのでしょう。



図2 アルド・マヌーツィオのプリンターズ・マーク

4. 調査報告

本資料の書誌調査の記録を掲載します（単位mm）。

調査月日：2017年3月7日

ゼッケル文庫排架記号：VI,D2-47

タイトル：Azonis Summa.Lugduni（図3 外観）

サイズ：173Y×250T

頁数：696頁（前付け28頁＋本文333×2頁＋後付け2頁）

製作年：1540年

印刷所：フレロン兄弟の印刷所

所在地：リヨン



図3 外観

[組版の状態] (図4)

大扉：ローマ風装飾囲み飾りの中に、蟹と蛾のプリンターズ・マーク (図5)

行数：68行

行長 (組み幅)：59

本文書体：ゴシック体一ロトンダ (図6)

本文活字サイズ (20行法による推定)：61G

欄外注：活字サイズ：60G

柱：有

前付のアクセント：ノド19, 天16, 小口23 (ここに欄外脚注), 地25

本文のアクセント：のど20, 天15, 小口28, 地29

左天：柱,

左ノド地：キャッチワード,

左小口：欄外注,

右天：柱,

右天小口：ノンブル (レクター),

右小口：欄外注,

右小口地：折記号番号 (i ~ iiiii) 16頁一丁折

扉裏：ローマン体が使用されている。ギャラモン系に見えるが、「e」はジェンソン系か。「系」でくくれない活字の姿形。

大扉裏の組版：ハーフダイヤモンド・インデンション (図7)

用紙：厚さの揃った安定した紙

製本：豚皮に細密な空押し。堅固な製本であり、天には墨が施されている。

最後に、本報告書を作成するに当たり、小川知幸氏 (東北大学総合学術博物館助教) に多くの御教示を賜りましたことを記して感謝します。

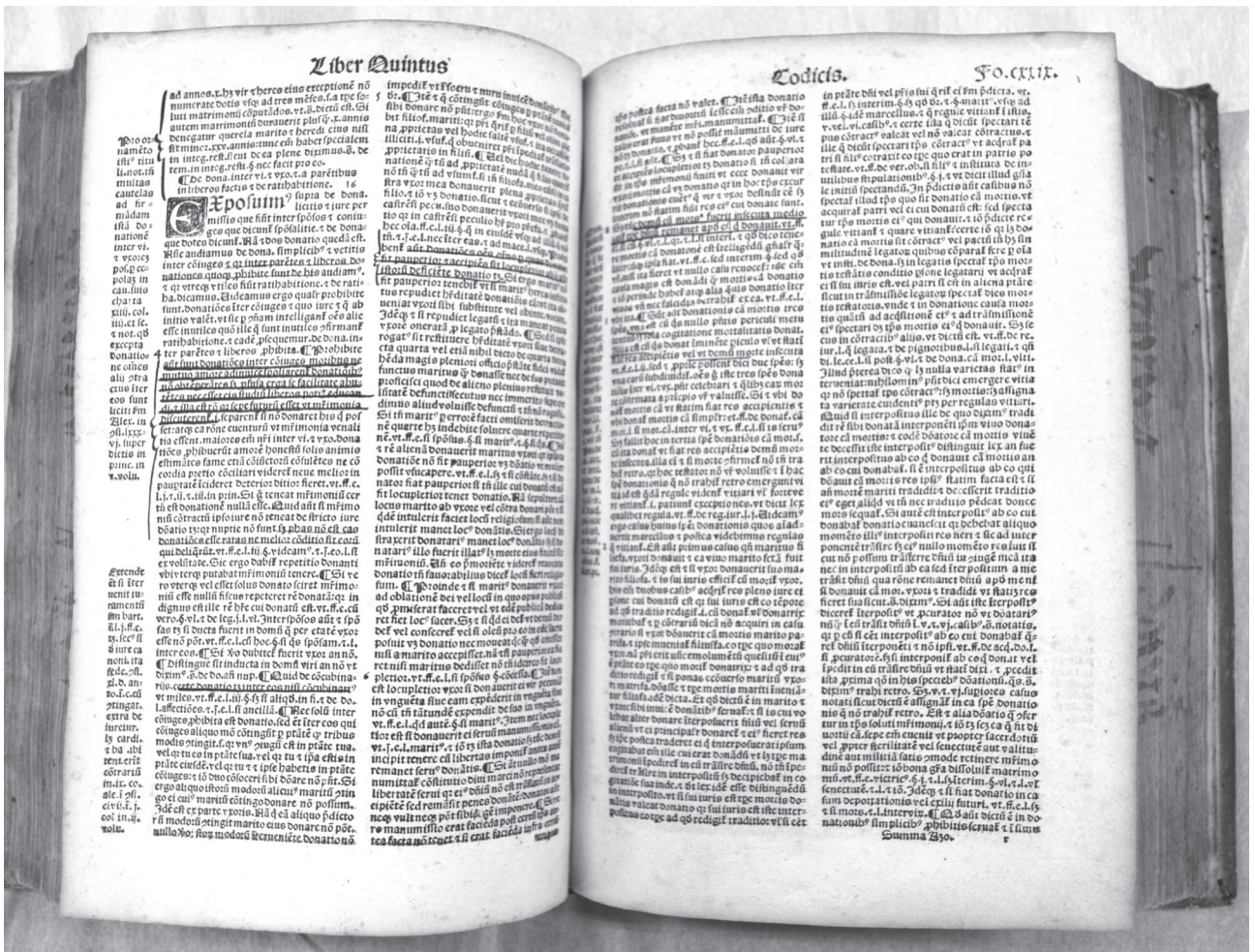


図4 組版の状態

参考文献

- 1) 石田啓「ルネッサンス期イタリアにおけるギリシャ語写本収集と本文校訂—in アテネ日本アカデミア設立に向けて—」『東北学院大学論集（人間・言語・情報）第 135 号』2003 年 7 月
 - 2) 欧文書体百花事典（朗文堂 2003 年 7 月）
 - 3) エラスムス『格言選集』（金子晴勇 編訳 知泉書館 2015 年 9 月）
 - 4) 塩野七海『ローマ人の物語 パクスロマーナ（上）』（新潮文庫 2014 年 6 月）
- * 696 頁もある本書と同じ本がデジタル化されて、web 上に公開されている。<https://books.google.co.jp/books?id=F41gAAAAcAAJ&pg=PP11&cdq=PERVTILIS+EX&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwilkJzL5-nSAhWBxrwKHZe3Ce0Q6AEIHDA#v=onepage&q=PERVTILIS%20EX&cf=false>

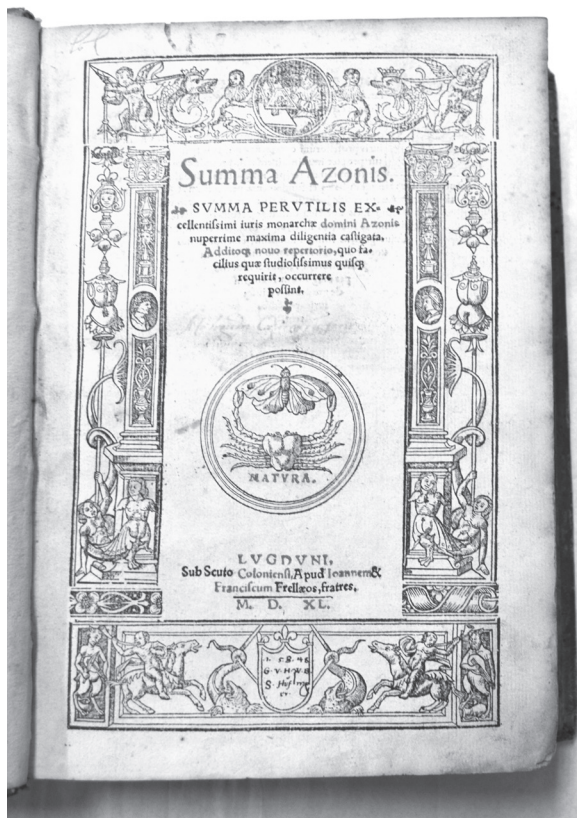


図5 大扉

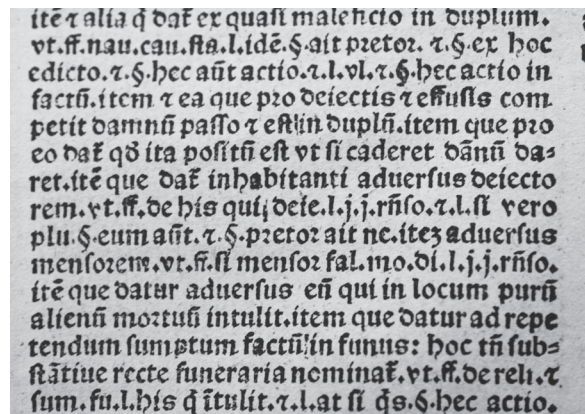


図6 ゴシック体—ロトнда

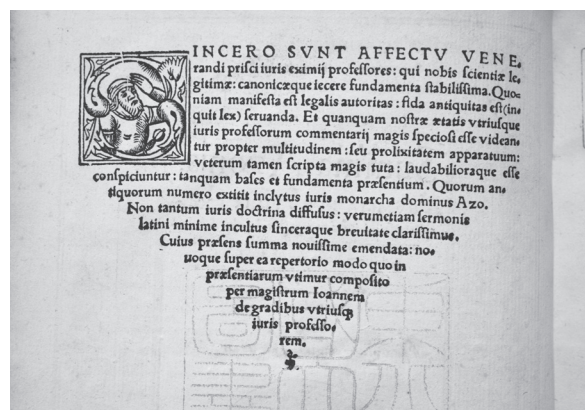


図7 ハーフダイヤモンド・インデンション

